

心をはぐくむ幼児音楽教育

—第二章「子どもの感性と音楽の精神世界」—

進 藤 務 子

‘Infant Music Education to Cultivate
the Inner World of Children’

Chapter II. 〈Children’s Sensitivity and Child-centred
Approaches to Music Education for Fostering Their
Personality Developments〉

SHINDO Michiko

Abstract. This is the gist of ‘Children’s Sensitivity and Child-centred Approaches to Music Education for Fostering Their Personality Developments’, the second part of my essay ‘Infant Music Education to Cultivate the Inner World of Children’.

I shall shed light on the importance of child-centred approaches to infant music education from the following points of view: the relation between tranquillity and children’s ability to concentrate by listening to sounds carefully.

I also analyse the influences of the methods and principals introduced by a couple of great music educationalists, such as Emile Jaques-Dalcroze, Kodaly Zoltan, and Carl Orff in Japan, examining the differences and similarities of each cultural background of other countries and how these educational ways should be taken into Japanese nursery schools in order to make them the most effective and suitable educational opportunities to today’s Japanese children.

Thirdly, I mention the ideal attitudes of the nursery school teachers when they assist children in familiarising music and when they encourage them to stimulate various music experiences in their daily lives. There is a strong bond between infants and memories and good enjoyable music experiences; genuinely authentic music which sinks into children’s deepest hearts, and adults’ affection to children which brings out children’s talents and active attitude to learn and live.

Key words : children’s sensitivity, infant music education at nursery schools, discovery of music in tranquillity, children’s folk songs, the true, the good and the beautiful.

キーワード：子どもの感性、幼児音楽教育、静けさの中にある音楽の発見、わらべ歌、真・善・美

序.

小論は、前著『心をはぐくむ音楽教育 —第一章「創造性と幼児音楽教育」—』の第二章として、「幼児音楽」を「聴く」ということの重

要性、子どもの「真・善・美」への感性と情操の発達、そして、感動と喜びを与えることによってその発達に寄与する音楽の在り方を、前著と同じ、全ての子ども達が受ける公教育の範疇と

定義した上で、考察していこうとするものである。第一章において、私は、子どもの心の中に、「創造性」が芽吹いていく過程を、外界からの働きかけによって、もともとわれわれの中に存在している人間性ともいうべき、「感」じ入る心と呼び覚まされ、その「歓」びを他者との「関」わり、共有することによって、更に深い創造性の核となるものを獲得していくと述べた。小論では、更にこの過程において、本来、高い価値を人生に与えるものとしての音楽が、彼らの魂にどのように語りかけていくのかについて、掘り下げて概観していくこととする。

I. <観>音楽は、静寂の中に見出される

私達は、常に音に囲まれて生活している。幼い子ども達の周りも、音として改めて認識することもないほど、様々な音に溢れている。日常生活の中で、テレビから聞こえてくる歌謡曲、道を行く車やトラックの音、遠くを走る電車の音、工事の音、はたまた、どこかで吠えている犬の声まで…音が絶え間なく続いている。

よって、私たちは普段、これらすべての音ひとつひとつに、特別な注意をはらって生活しているわけではない。

しかし、音を、まず音として認識し、心に留めてみると、色々なことが見えてくる。ためしに、音を意識してみるという経験が、思いのほか、集中力を要するものだということに改めて気づき、驚かされるのではないだろうか？音を意識する、すなわち、静かな状態とはどういうものだろうと、外界にじっと耳を澄ませて傾けてみれば、普段これらの騒音とも呼べる音に掻き消されてしまって、聞こえてくることもないような小さな音にも気付くことが出来るだろう。このように、静寂の中にこそあるような音を意識する繊細な心が、幼い子どもたちの感性の発達を促す、重要な第一歩ではないだろうか。

以前、私は、ふと何故「観音」さまは、「音を観る」と言うのだろうかとか疑問に思い、松原泰道氏の『観音経入門』を紐解いたことがあるのだが、この「観る」というのは、実際の目で

見るということとは少々異なり、心の目（心眼）でじっと、静けさのうちに、己に内在するものを自覚して向き合い、自ずと感じられるもの・見えてくるもの、ということのようである。同氏は、この人間性の豊かさと深さの象徴という意味で、観音さまは、大音楽家と言えるのだ、と述べている。

また、同書では、詩人・八木重吉の短い詩も紹介されている。

『幼い日は 水がものいう日 木がそだてば
そだつひびきが 聞こえる日』

実際に聞こえてくる音から心のはたらきを通じて観えてくるものを捉える幼い純真な心。静寂の中でこそ発揮される、こうした感性こそ、人間に生まれながらにして深く埋め込まれている、繊細で優しい、細やかな心の原点と言えるだろう。

しかし、先ほども述べたように、意識を集中して初めて得られる静けさの中で、ささやかな音をキャッチすることや、成長していく子ども達がそういった感性を自覚し、さらに失うことなく保ち続けること、それは、音楽へ目を向ける基本の一步になるのだが、現代は、やはり、うるさすぎる。子どもの心の成長は、わずかな時間で変化していくものではないため、日常生活の小さな場面場面に心配りながら、長い目で捉えていく必要がある。

作曲家の中田義直氏は、『静けさと音の心とやさしさと』という対談の中で、ある四歳の子どもの、「静かにすると、ペンペン草は聞こえるの。うんと静かにすると、うんと聞こえるの。」という微笑ましいエピソードをあげ、白紙の部分に絵をかけるように、静かなところに音楽が生まれる、それゆえに静かなことに無関心ではいけない、と述べておられる。「心の耳と身体」の耳を一致させて、よく聞いてごらん、といった生活」。それがやはり、美しい音、ささやかな音を音として自分の中に響かせる心のゆとり、それが大変重要な経験として積み重なっていくのである。

星野圭朗氏の『創って表現する音楽学習』より、この静けさの重要性をよくあらわした部分

を引用させていただこう。

「静かさこそ文化の源であり、心の緑である。この問題を解決するには、長い時間が必要である。まず騒音に無関心な人々の耳を、敏感な耳に変えなければならない。それは大きく教育の力にゆだねられなければならない。」

Ⅱ. <感>子ども自身が、音楽体験の「主人公」に

公教育の中で音楽体験を考えると、とすれば、幼稚園や保育園でのカリキュラムの中でのみ、画一的・半ば強制的に歌わされたり、リトミックとして、指示に従って身体を動かすことに終始してしまったり、と、自発的に「もっと、関わっていたい」という、子ども自身からの興味の引き出しができなくなる懸念も否めない。

本来、子どもは、自分自身が興味を持つことに積極的に関わろうとする存在である。さらに、成長に伴って、自分が興味を持って探求した結果、発見したものを、友達、親、保育者など身近な人と共有することに喜びを見出すようになっていく。このような特質をふまえ、保育者は、子どもたち自身が自発的に関心を持ち、意欲を持って取り組むことができる環境をしっかりと整える必要がある。

音楽は、リズム・メロディー・ハーモニーという三大要素をはじめ、強弱・テンポ・形式など様々な要素を持つ複合的な芸術であるが、子どもの音楽もまた、それにつらなって発達していく総合的なものなので、遊びや運動という細分化されたもののみでとらえていくことは、ナンセンスである。幼児の音楽がまだ、一般的な意味での芸術としての音楽のプリミティヴな段階であっても、子どもの音楽ならではの特殊性を踏まえた上で、音楽は生きるということそのものへの様々なアプローチであるという視点を常に持っていなければならない。

ここで、音楽のさまざまな要素を、子どもの発達段階を考慮しながら、もう少し詳しい視点から見る必要があるだろう。

▽オルフ教育の理念

このように、機械的な習得のために、教え込むような教育に頼るのではなく、子どもの内側から引き出すように指導することの重要性を提唱した、ドイツの作曲家カール・オルフの「オルフ教育」の理念について、触れておきたい。

オルフは、特別な音楽教育のためのメソッドを確立したのではなく、音楽教育にとどまらない、全人格的な教育の普及に努めた人物であり、自らの内側から、引き出される教育を受けていく中で、子どもたちが自ら考えを養い、それに基づいて行動できるようになっていくことを目指すものであった。

オルフ教育の理念の支柱は、大まかに述べると、細田淳子氏の指摘されるように、

<i>自然な方法に従い、音楽と子どもの体の動きを切り離さないこと

<ii>子どもの音楽教育には、言語的要素も不可欠で、そのためには、母語が基盤となるべきこと

<iii>子守歌を歌ってもらったり、親と遊びながら、まずは家庭の中で音楽にふれる体験を持つこと

<iv>技術的な間違いなどないので、即興的な表現を大切にしながら、発展させていくことなどがある。

『幼稚園教育要領』の5つの領域のうち、〔表現〕領域にも、この理念は生きており、すべての子どもに対する普遍的な教育において、一人一人の内面にもスポットライトを当てていくことで、非常に豊かな音楽教育、ひいては人間性の土壌を耕していくのに、ぜひ、積極的に実践していきたいものである。

オルフは、自らこの理念を取り入れた教育のアイディア集のような位置づけで、全5巻からなる曲集『子どものための音楽（オルフ＝シュークベルクの一部）』を編集している。現在では、これは、<ii>の理念によって、独自の曲を編集した各国語版が出版されており、日本語版も例外ではない。

オルフ教育の中では、体と音楽の一体化が大変重要であるとして、誰もが扱える楽器として、普遍的に幼い子ども誰もがでできる手拍子などもこれに含み、また、美しい音を奏でる木琴や鉄琴などを開発し、ひとつの提案として、全体的に音楽を楽しみ、親しむ中で、子どもたちが内在する何かを表現していけるような工夫がなされている。

保育者に求められるのは、オルフがもっとも大切だと位置づけた、これらの理念の支柱を基礎として、目の前にいる子どもたちの内側から表現したいことを引き出し、柔軟に対応していく姿勢である。オルフに先駆けること100年ほど前、幼児音楽教育の祖として知られるドイツのフレーベルも、「いざ、われわれの子どもに生きよう」をモットーに掲げ、人間の内に持つ「神性」を表現するために手段を示し、道しるべとなるべく、子どもの発達に追随していくようにと説いている。

実際の教育現場で、これら大きな理念の一部をつまみぐいするような取り入れ方をしていないか常に留意しつつ、子ども自身を音楽教育に主体的に関わる存在として捉えながら、自分たちは引き出す手助けをするのだと心がけていくことが肝要である。

●リズム

ハンス＝フォン＝ビューローの言葉に、「はじめにリズムありき」という有名なものがあるが、人間がまず最初に経験する音楽的要素は、言うまでもなく、この「リズム」である。

⇒母親の胎内にいるときから、母の鼓動を聴き、また自分の心臓の律動を感じとる。

⇒また、生後間もない期間で、規則正しい「呼吸」という、自身の生命の源を成すリズム感と結びつけながら、言葉を模倣していく。

⇒2～3歳頃には、基本的な運動機能の獲得に比例して、指先の機能の発達も著しい。音楽やリズムカルな動きも可能となっていく。

音楽の原点ともいうべきは、やはりこのリズムだと言って、差し支えなからう。大まかに言っ

て、2歳ごろまでの幼児は、音楽の諸活動が未分化な時期であるが、はじめは自分自身の体内のリズムを感じ取ることから始まり、それから肉体や感情、言語の発達に応じて、次第に自分以外のリズムを刻むものへの反射や模倣の能力を身につけ、吸収していくようになる。

私たちが生まれながらに体の中に内在させている、リズム。体に言葉などで無理に何かをさせる、のではなく、子どもの内なるリズムを根底に捉えた上で、彼ら自身の感覚や経験にゆだねながら、音楽性の成長を促していくことが大切になってくる。

一般的に、リズムは、「楽音の長短・強弱の組み合わせ」として定義されることが多いのだが、リズムは、生き生きとした音楽の生命そのものである。後述する、リトミックメソッドを確立した、エミール・ジャック・ダルクローズ博士は、音楽を感じ、音楽を好きにして、音楽性を伸張していくには、「生活にもっとも密接に結びつき、そしてもっとも鋭く感覚に訴える強い要素はリズムだ」と確信し、心と体の一致をめざしていくことを提唱している。

また、その著書『リズム運動』において、「わたしたちの指導のねらいは、学習の終わりに生徒たちが‘知っています’というのではなく、‘経験しました’と言えるようにさせることである」とも述べている。

リズムという音楽の息吹を感じ取る力—それは、経験によってのみ培われるものであり、体の発達に比例して、時間をかけて体得されていくものである。

▽ダルクローズとリトミック

上記で述べたように、リトミックというメソッドは、幼児音楽の世界で、最近非常によく音楽活動として取り上げられているが、決して失念してはならない注意点がある。

創始者であるダルクローズ博士が提唱したリトミックとは、

＜i＞ソルフェージュ

＜ii＞リズム運動

＜iii＞即興演奏

の三部門から構成されていて、これらすべて完結して初めて、リトミックメソッドなのである。もともと、ダルクローズがリトミックを発展させていった背景は、スイスで、ジュネーヴ音楽院の学生たちに教えていたところ、彼らはいうまでもなく、一般の人たちを比較しても、高い音楽的素養を持つにもかかわらず、いかに正確に・素早く運指できるかといった、知的な、もしくはテクニク的なことにばかり偏重しがちであったことを憂いて、豊かな感性を養い、表現力を伸ばし、創造性へと発達させていくことを一連の流れとする「種子を蒔く前に土壌を整える」作業を、と考えたことに端を発していた。

しかし、日本におけるリトミック教育には、深刻な問題点を抱えている。それは、リトミック教育の名のもとに行われている幼児音楽の教育が、ともすれば、機械的な体操のようなものに終始している感が否めないことである。

子どもたちは、まず何か指導者の投げかける音を知覚し、それに变化をつけた身体運動で反応することは、リトミックのほんの一部にしか過ぎず、ここにだけ焦点をあてられる傾向が強いのは、全体的な音楽性を目指そうとするダルクローズの意図とは、むしろ正反対の方向へ進んでいってしまうことになる。

殊に、＜i>に挙げた、ソルフェージュの部分などを、実態として、ほとんど考慮されていないまま、つまり、音楽を子どもたち自身のものとして、「聴くこと」から「演奏すること」への取り掛かりとするのではなく、リズム感を良くするというにのみ主眼をおいて、幼児教育の現場に持ち込んでしまっただけは、本末転倒なのだ。理念や、メソッドの一部だけをつまみ食いしたような形では、本来目的とされているものを見失ってしまう。

ダルクローズ博士が、もともとと言わんとしていたことは、「リズムやダイナミクスといった知覚は、聴覚だけにたよっているのではなく、筋肉や神経の感覚と連動して高まる」というものである。音楽の生命の根幹であるリズム

を体得した後、平行して行われるソルフェージュで、音の高低や識別、相互関係といったものへの感覚的理解を深め、さらに即興演奏にて、言葉や手法では表現できないような自己の内面の活動を、音楽的思考を通して、主体的に創造性を発揮して、表出させるようになる。そのすべての過程を鑑みて、子どもたちの中に、ダルクローズが言う「内的な音楽的感覚」を伸張させるように、指導が行わなければならない。

●メロディ

日本語で、「旋律、調べ」と訳されることの多いメロディーについて、筆者は、音楽における言葉・表情と言ったものであらうと考えている。ここでは、子どもの音楽教育の観点から、歌との関連性を中心に、メロディについて考えてみたい。

迫新市郎氏は、『創造性を高める音楽教育』中で、A・W・アンブローズの一節、「歌曲は、音の中にとけこんでしまった言葉の芸術である」という部分を紹介され、小論でも述べてきたリズムとともに、音楽美を造詣する双璧をなすものとして、メロディは美的心情の発露だと指摘されている。

歌曲は、感情や言葉の発達とメロディが不可分に結びついている特性を持つものである。単なる音階を用いて、感情表現を試みた場合でも、長調・単調などのさまざまな変化が、その時々感情や言葉のもつイメージを結びついて、創意工夫がなされるだろう。

メロディと、言葉の内包するリズムとの融合として、まだ非常に音楽性の初期段階にある子どもたちの中にも、自然と受け止められていく歌曲といえ、わらべ歌があげられる。わらべ歌は、子どもの言語的な発達や、心情的な発達を密接に結びついた要素で成り立っており、世界各地に存在している。子ども自身というよりは、まず父母が歌って聞かせるような子守歌を始め、子どもを遊ばせるための歌、そして子どもの身近な心情を歌った歌、季節や行事などに

関する歌等々の種類があげられる。

こういったわらべ歌の数は、膨大であり、日本国内だけを見ても、もはや数えることもできない、たくさんのわらべ歌がある。脈々とつながる日常の中でもどんどん生み出されていくため、世代を超えて歌い継がれていたり、あちこちで新たに生まれ続けていたりする。このことから、わらべ歌は、子どものみにとどまらず、大人にとっても、いかに身近で生活に密着しているかを伺い知ることができるとともに、一般的には、あまり感情を表に出さない民族と言われている日本人にとって、このように日常生活の中で素朴に歌われてきた歌には、人々が本当の思いを表せる数少ない一つの手段であったのだろうとも推測できる。

皆川達夫氏は、『音楽は、まず声楽として始まっているようだ。＜歌う＞ということは、＜楽器を演奏する＞ということ以上に、人間に直接結びついた行為である。楽器を持たないもっとも原子的な種族も歌うことは知っている。』と指摘している。歌は、一種の語りかけであり、どのように歌うか、ということも、重要な要素になってくる。

世界のこどもを取り巻く音楽事情に目を向けてみると、民族ごとに異なる音の組み立て方や、言わずもがな、言語のもつ独特のリズムが存在し、それらがその文化を受け継いでいく子どもたちにとって、もっとも自然に音楽の土台となっていくという意味では、子どもの音楽の中にも相違があるといえるし、また、わらべ歌にも、例外なく、それぞれの民族性や歴史、伝統に基づく深い人間性が現れていることに、改めて気づかされる。しかし、一方で、幼い子どもたちがわらべ歌を出発点として、それぞれの成長や発達の過程で、音楽に触れていくという共通点も見出すことができるのは、非常に興味深い。

このような、二面性を持つ子どもの音楽の特質に留意した上で、保育者は、自分たちの文化や伝統を大切にしながら、世界の音楽を鑑賞したり、表現することを、出会いや関わりを通じて、子どもたち自身の音楽性の血肉とできるようにする使命を担っていることを自覚しなければ

ばならないと思う。

▽コダーイ・システム

さて、次に、上述してきたように、子どもと音楽の導入として、各地・各民族に固有な「生きた音楽」として、わらべ歌に関連した教育の重要性を説き、そこを出発点として、各国の音楽へと子どもの音楽を発展させていき、生涯音楽教育の構想にも言及しているコダーイ・ゾルダンについて、見てみよう。

コダーイは、ハンガリーの作曲家であり、また音楽教育学者・民俗音楽学者でもあった。コダーイも、「人類が本当に音楽の価値を知るとき、より幸せに生きることができるであろう」という強い信念を持ち、特に、幼い子どもの柔軟な適応力・能力の伸長力などに対する、深い洞察を加えた上で、オルフと同様に、美しい民俗音楽（わらべ歌）を歌い聞かせてやることから始めて、歌を中心においた、万人のための音楽教育を提唱していることに加え、初期の段階から、注意深く聴くことが音楽の価値を見出す力を高めることにも、踏み込んで言及している。

つまり、コダーイの主張は、音楽の専門家の育成というよりも、音楽の価値を本当に聴き分けられる力をもったオーディエンスを育成するような、一般的なものとしているため、器楽の技術指導よりも、すべての人が音楽の喜びに触れて体感できるようになるために、聞くこと、歌うことは、とりわけ重要な意味を成している、ということである。

幼い子どもの特徴のひとつである、親和性の高い物事にたいする快の感情をもつことを考慮すれば、さらに、家庭や地域で聞きなれたわらべ歌から、人とのつながりや喜びを見出すことが自然で容易なものとなっていくし、わらべ歌は比較的単純なリズムやメロディからなるものであり、また言葉の抑揚と音楽の一致しているため、子どもの発達に寄り添うものであるから、やはり、音楽教育の順序として、ここから出発すべきであろう、と思う。

「音楽に向かって、子どもを育てることの第一歩は歌である。」コダーイは、この後の子どもの音楽性の素地を形成していくプロセスとして、これらのわらべ歌に数多く接していけば、言葉だけでなく、他の表情や身体表現も豊かに育ち、耳の訓練や鑑賞を通して、音楽に注意深く聞き入る姿勢の発達も育まれていく、とした。そして、音楽を聴くことから感動体験を得られるようになってくれば、次第にこのようにして培われた音楽への態度を基盤に、自国の民謡に限定しない指導を導入していくのが良いとしている。

これに加えて、身体的運動や打楽器によるリズム取りなども加え、コダーイ・システムは真理を伝えてくれるような「良い音楽」を求めて、進められていくのである。

Ⅲ. <関・歓>人との調和と、音楽の真・善・美の体験

●ハーモニー

最後に、音楽三大要素の3番目、ハーモニーについて、子どもの音楽教育の中でどう捉えていくのが望ましいか、を考察していきたい。

ハーモニーは、子どもたちにとっては、音楽との関わりから生まれる感動体験や、火との関わりから得られる個々人の表現の共有でもある。心をこめて、バラバラだった表現や内面からの発露から、それらを糸のように撚り合わせてつむぎだしていく中で、新しい感動を生み、美しいもの、より良いものを完成させていこうとする姿勢を持って取り組むことができるようになっていくのが、ハーモニーを織り成す力である。

ハーモニーは、子どもたちの日常生活の中における初期の段階で、無意識に起こりうることでもある。例えば、音は、上述したように、意識的であっても私たちのなかに入ってきてしまうもので、かといって、それを遮断することもできず、他の感覚器官と比較しても、「聞く」ことには、受動的な側面が強い。それゆえに、子どもたちが、ふとした音をひろうと、体がご

く自然に動いたり、合わせて口ずさんでいるというように、身体的な知覚が先立つことがある。このように、偶然の模倣から自然発生的にハーモニーが生まれたり、自分が何かの音から受けたイメージを誰かに伝え、共有して楽しもうとする遊びの一環で、ハーモニーが生まれたりすることもある。そして、それを受けた側とのかかわりによって、さらにイメージを膨らませたり、より楽しもうとする意識が子どもたちのなかに芽生える。

保育者が、このかかわりにおいて、気をつけなければいけないことは、子どものこういった表現を、丸ごと受け止めてやることではないかと思う。ハーモニーは、美しいものでなければならぬとか、そのための技術的なことを学ばせろというよりも、もっとそこに、人とのかかわりの中で育っていくもの、表現を共有して楽しみたいという子どもの根底にある気持ちに寄り添うことが大切だ。

筆者は、心の共有を大切にしながら、しだいに、他者ととともにリズムがそろったときに出来上がる、すっきりとした表現や、感情にふさわしい美しい響きをもつ旋律の感じなど、少しずつ保育者が成長への願いをこめて、紹介していけば、子どもたちの中に、表現と心の共有を目指す上での更なる目標が出来、それに向かってさまざまな発見をしつつ、学んでいくことが出来ると信じている。

感性は、表現によって培われていく。その感性が豊かな音楽性と結びついていくためには、保育者自身も、一人の表現者としてのあり方が求められるだろう。大人は、子どものガイドとして、子どもの内なる成長を促しながら、相互関係の中、適切な援助を行っていくものであるが、自分自身もまた、その楽しさを経験していなければならない。子どもの表現を、保育者自身でも受け止めなければならないからである。

また、筆者は、この目標を完全なものとしていくためには、子どもと音楽の関わりに、「真・善・美」の側面が不可欠であると考えている。「真・善・美」は、非常に抽象的な概念であるものの、これらの間に明確な区別は存在せず、

ずっと長い時間をかけて、心の深い内部に浸透していき、人格形成そのものの根底に静かな大きな影響を与えるものだと思っているからである。

本当に美しいもの・良い音楽と、これらに触れる良い経験・感動の積み重ねが、刹那的なものではない音楽の楽しさを理解できる心・真に価値あるものを見極める力、人との関わりから生まれる感動の共有となって、子どもの純粋な感受性に大きく働きかけをしていく。生涯教育における悠久の「真・善・美」は、心の中でのみ存在する。

演奏することに限定せず、他者の発信する音楽と一体化して触れ合うことができるようになる力。受け取る力。それを核心を的確に掴んで共有し、自分の中で、さらに創造性の原点として自ら発信する力。子どもの内部に宿っている情操の灯火は、人とのかわり、良い音楽との調和の中に身をおくことで、力強い光となって、人生をより一層豊かなものとしてくれることだろう。

第二部・結

小論第二部では、「心を育む子どもの音楽教育」について、音楽の特質や、子どものための音楽教育のメソッドに触れながら、耳を傾けることの大切さ・初期の段階での子どもと音楽の関わりとそれに対する大人の手助けの姿勢・本物の美しく善い音楽とは何かといったことに述べてきた。

音楽との出会いや経験によって促される子どもの感性の発達は、一朝一夕に効果をもたらすものではないが、それ故に、一過性のものではなく、生涯を通して、全人格形成に関与するものとなる。現代、おろそかにされがちな、集中して丁寧に聴くという姿勢・子ども自身が主体的に未知のものと関わりを持とうとする力・人

や音楽の関わりに感動する心を、日常の公教育でしっかりと育てていきたい。

〔謝 辞〕

小論の作成にあたり、幼児音楽教育における多くの先達の研究にご教示を賜った。ここに、深く謝意を表す。

〔引用文献および参考文献〕

- 浅見均；『子どもと表現』，初版，東京，日本文京出版，2009.3.25
- 井口太；『幼児の音楽教育』，第3刷，東京，音楽教育研究協会，1992.2.20
- 大畑祥子；『保育内容 音楽表現の探究』，初版，東京，相川書房，1997.4.25
- 岡潔，周郷博；『日本人のこころと情操』，増補版第一刷，東京，小学館，1976.4.1
- 筧三智子；『子どもの発達と音楽』，第三刷，東京，音楽之友社，1980.1.20
- 小林美実，高野雅子；『表現・幼児音楽②：保育者の音楽の基礎技能と基礎知識』，初版，大阪，保育出版社，1994.10.25
- 迫新一郎；『音楽教育』，第十一刷，東京，玉川大学出版部，1990.5.25
- 中田喜直，近藤薫樹；『対談 静けさと音の心とやさしさと』，音楽・歌・リズム，初版，東京，草土文化，1989.1.10
- 花原幹夫；『保育内容 表現』，初版，京都，北大路書房，2009.3.30
- 松原泰道；『観音経入門』，第43版，東京，祥伝社，1980.8.25
- 米沢純夫；『子どもを音楽の主人公に』，音楽・うた・リズム，初版，東京，草土文化，1975.10

(2012年3月19日受稿)